

## 2. 大分県特定家畜伝染病防疫演習の実施と検証

宇佐家畜保健衛生所

○本多祥宏 加藤洋平 (病鑑) 尾形長彦 (病鑑) 泉修平 吉田秀幸

### 【はじめに】

本県では2004年2月の九重町での高病原性鳥インフルエンザ（HPAI）の発生以降、特定家畜伝染病を対象とした地域の防疫演習を毎年行っている。2011年2月の大分市でのHPAI発生を受け、あらかじめ県内6振興局管内から各1農場を選定しておき、演習当日の朝に演習対象となる1農場を発表し演習を行うという、より実践的な方法を昨年度から実施することとなった。2012年度は当家畜保健衛生所管内の東部振興局が選ばれ、防疫演習を行った。今回、演習後にアンケート調査を実施し、本演習の検証を行ったのでここに報告する。

### 【演習の概要】

2012年10月4日に杵築市の48,000羽飼養の採卵鶏農場でHPAIが発生したという想定で実施。現地演習として、防疫作業を行う動員者が集合し受付、問診等を行う集会場を杵築市の体育館に、想定農場及び農場に入る前に防護服等の着脱を行う前線基地となる農場敷地外作業場（クリーンゾーン）をグラウンドに、緊急消毒ポイントを駐車場に設営し演習を行った。現地振興局、家畜保健衛生所、保健所の職員及び市の職員の約80名が現地対策本部、各作業場の運営や第二次動員者の受入れを行う第一次動員者として参加した。また、殺処分等の防疫作業を行う第二次動員者として60名が他の振興局から参加した。

### 【検証ポイント及び方法】

#### 1 検証ポイント

過去のHPAI発生時及び前年度の防疫演習時の検証から明らかになった課題について、今回の検証のポイントとした。(図1)

- (1) 備蓄資材の輸送
- (2) 現地総合対策本部の運営及び連絡体制
- (3) 現地作業場の設営及び運営

		備蓄資材の輸送	連絡体制	現地作業場運営
2011年2月 大分市での HPAI発生時	検証・課題	・行き先の混乱	・連絡窓口多数	・動員者の作業場への到着遅れ
		・積込人員不足	・連絡方法不統一	・未経験の動員者による会場運営
2011年度 県防疫演習	ポイント	・資材の管理	・テレビ会議システムの再確認	・各作業場の設営及び運営 集会場 農場外作業場 (クリーンゾーン) 緊急消毒ポイント
2012年度 県防疫演習		・家保での積込 ・作業場へ輸送	・対策本部と現地との情報連絡	

図1 過去の課題と本演習の検証ポイント

## 2 検証方法

演習作業計画と実際の作業終了時間の確認による各作業場の運営状況の検証を行うとともに、HPAI発生時に現地対策本部や第一次動員者として各作業場の設営及び運営に携わる当該振興局職員をはじめ家畜保健衛生所、保健所、当該市職員を対象に、演習終了後アンケート調査を行い検証を実施した。

### 【検証結果】

#### 1 備蓄資材の輸送

備蓄資材を行き先別に色分けし 保管しておくことにより、積み込み作業が的確にできた。(図2)

集会場行きの資材は赤色、クリーンゾーン行きの資材は青色、ホットゾーン行きの資材は緑色と分かりやすく表示した。このことで資材を速やかに積み込むことが可能になり、輸送に係る大幅な時間短縮が図られた。



図2 色分け保管方法の一例

#### 2 現地総合対策本部の運営及び連絡体制

テレビ会議システムにより、県総合対策本部の農林水産部長室と振興局、家畜保健衛生所の間で会議が行われ、現地情報の報告や本部からの指示が適切に行われた。

連絡体制については、連絡窓口及び方法を統一し、明確化したことにより、整理され適切な情報連絡が行われた。(図3)

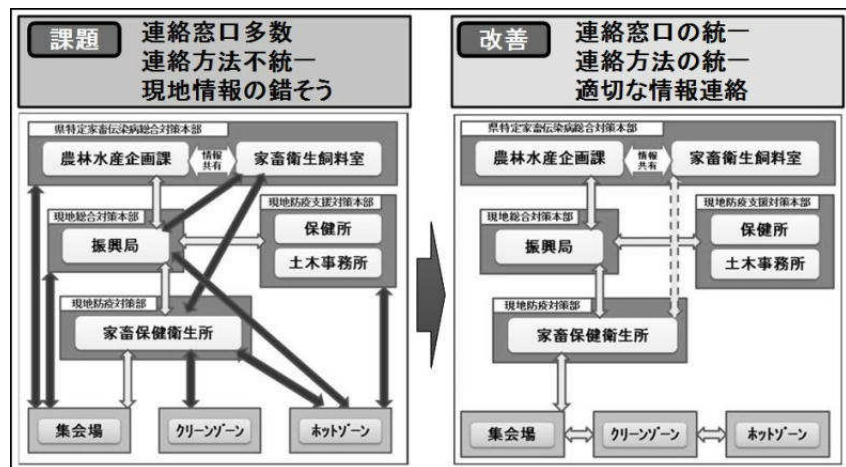


図3 連絡体制の整備

#### 3 現地作業場の設営及び運営

各作業場の設営については、第一次動員者の集合時間を設定することにより、設営時には動員者が集合し、各作業場総括の指示のもと迅速に行われ、完了予定時刻より20分以上早く設営が完了した。(図4)

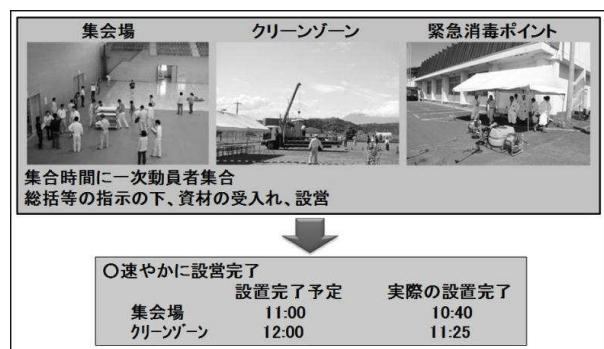


図4 各作業場の設営

各作業場の運営については、総括や係長が作業内容を把握し的確な指示をすること、動員者の取り組み意識が重要になるため、各担当者による連絡会議を行い現場での指示内容の確認や連携を強化し、また演習参加者には特定家畜伝染病や「大分県高病原性鳥インフルエンザ及び低病原性鳥インフルエンザ防疫ガイドライン」の勉強会を行うなどして意識を高め、準備を行った。

(図5) また、事前の連絡会議には市の職員も参加し、連携が図られた。

各作業場では、総括、係長で打合せを行い、第一次動員者への指示、説明、第二次動員者の受入れ準備を整えた。(図6)

集会場では動員者の体温及び血圧測定、問診、作業内容の説明、クリーンゾーンではPPE（個人防護用具）の着脱訓練、緊急消毒ポイントでは車両の誘導や消毒作業を行った。

(図7)

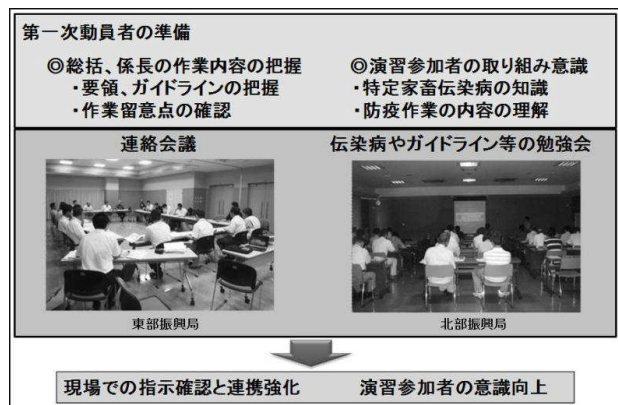


図5 第一次動員者の連絡会議及び勉強会



図6 作業場での打合せ



図7 各作業場の運営

演習参加者の取り組み意識についてのアンケート結果では「演習の前から自分の役割を知っていたか」、「県の防疫要領等を把握して演習に臨めたか」という質問については、79%が「はい」と回答し、「運営ができた」、「自信につながった」という回答に反映された。「現実に近い訓練ができたか」という質問については、

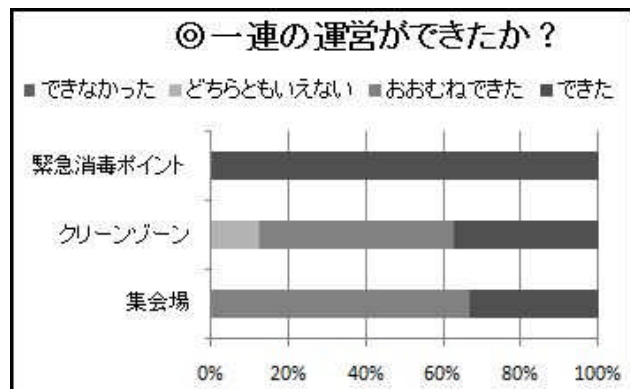


図8 アンケート結果（運営）



担当によって演習の内容に差があり、「できなかった」及び「どちらともいえない」との回答が34%を占めた。(図8,9)

動員者の役割や要領等を把握することにより、スムーズな運営が行われ、本演習が実際の作業への自信につながった。

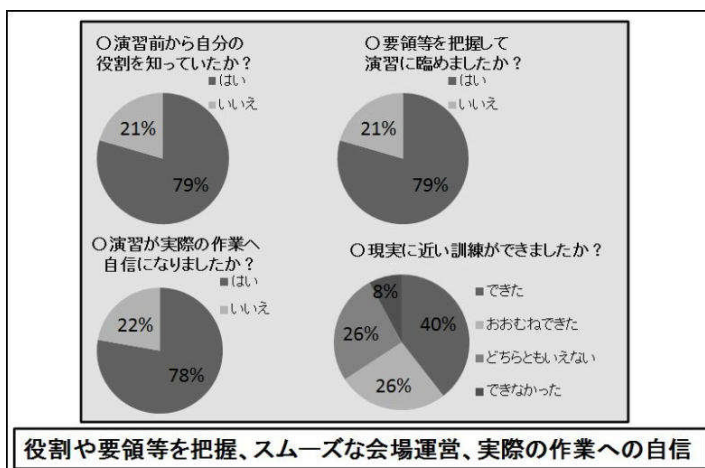


図9 アンケート結果（参加者の意識）

【まとめ及び考察】

本演習の検証の結果、備蓄資材については、色分けをすること及び積込み人員を確保することで、搬送の確実性が向上し、積込み時間の短縮が図られた。連絡体制については、連絡窓口、連絡方法の統一により適切な情報連絡が行われた。また、現地作業場の設営については動員者の集合時間を設定することにより迅速な会場設営が行われ、連絡会議や勉強会等の実施により、意思統一が図られ各総括及び係長の指示のもと、スムーズな運営が行われた。

全般的におおむね良好な演習が行われたが、連絡体制において「一部連絡が集中する」、集会場にて「総括以外の係長がわかりにくい」、「担当によっては現実に近い演習とはならなかった」等の今後の課題も見つかった。(図10)

特定家畜伝染病の発生というリスクに備えるためには、継続的な改善を推進することが必要であり、防疫演習を継続実施し、検証結果を生かしていくことが必要である。これをマネジメント手法であるPDCAサイクルに当てはめると、目的を明確にした演習計画「Plan」、計画に沿った演習の実施「Do」、演習の検証及び参加者の意見集約「Check」、演習方法の検討やガイドライン等の見直し「Act」のサイクル(図11)ができる。今後さらに防疫演習を有用なものにするため、PDCAサイクルを継続していき、発生に備えた万全の準備をすることが重要と考える。

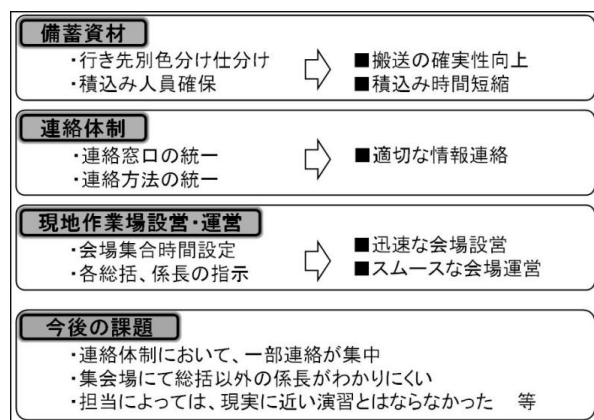


図10 本演習のまとめ

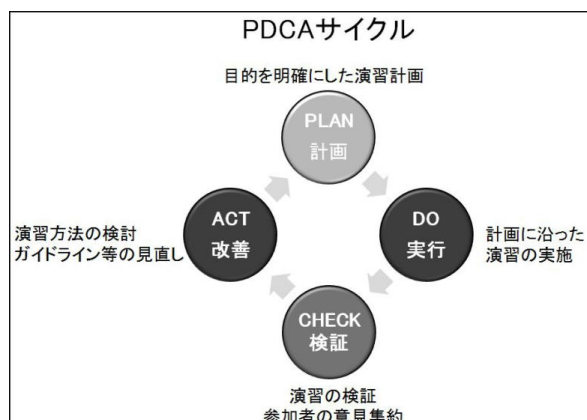


図11 防疫演習に係るPDCAサイクル